

# 九州畑作農業構造

## 第1報 中部平地の構造

井芹 徹\*・下舞 隆夫\*・立野 寿之\*\*

ISERI, T., SHIMOMAI, T., and TATENO, T. Structure of Upland Farming in Kyushu.

### 1. Farming structure in lowland of central Kyushu.

所得と労働生産性の低い畑作農業に於て、今後の発展の方向は生産力の向上である。如何にして生産力を向上せしめるかと云う問題の解明には、それがもっている農業構造の分析から始めることが必要であろう。

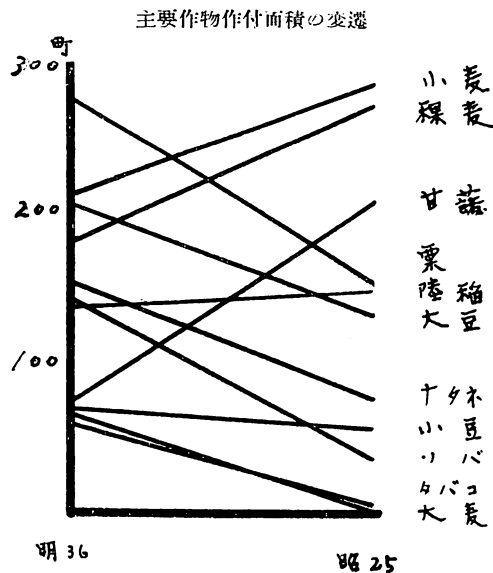
経営の立置条件 標高 30~150 m の台地で、地下

\* 九州農業試験場 \*\* 福岡縣陽南高等学校

水の低い軽鬆な火山灰土壌である。気候は酷暑酷寒である。経済的には熊本市より 10 余 km の距離にあり必ずしも不利ではない。地目の構成 山林少く、原野は皆無で畑率が高い。これらは堆肥の材料となる有機物の取得が困難な原因となつている。経営規模比較的に大きい。経営組織 役畜を飼つている耕種主

体の農家が多く一部に耕種と養蚕、耕種と畜産の農家がある。作物組織は、畑作地としては割合に集約度の高い多毛作に適した組織であるが、それは労働集約的である。O村の明治36年と昭和25年の主要作物作付面積を比較すると図のとおりである。これによつて当地帯の畑作物作付面積の変化が窺知できる。作物の品種、土地の高度利用が進んでいるので、労働のピークを低めるために品種の選択に注意を払っている。例えば一戸の農家が小麦の農林61号と白ブロンズを栽培して収穫時期のピーク低下をはかっている。作付体系、土地の高度利用をはかるため間混作が多い。地力消耗のはげしい暖地畑作農業でありながら、積極的な地力増進は考慮されていない。消極的には作物の種類による地力低下対策が考えられている。農機具

従来耕耘整地運搬にのみ畜力を用い他は殆んど人力主体の農機具が使用されていたが、近年労働生産性向上の見地から畜力カルチベータが導入された。しかしなお能率の高い動力農機具は殆んど導入されておらず、多分に多労働な人力農具が使用されている。家畜、戦前圧倒的に多かつた役畜としての馬が褐牛に代替されつつあるが、なお当地帯では馬が多い。綿羊は戦前より飼育が盛んで、乳牛は戦後水田主体の農家に飼養され今後は畑地帯に増加の傾向にある。肥料、有機質肥料の要求は大きい。既述のように採草地がな



いので困っている。熊本市近郊では尿尿利用が盛んで、また金肥の施用も少くない。労働配分 5月から11月まで平均して強度の労働がなされている。生産力別に分析する。経営の成果 甘藷、陸稲、麦、それに酪農家では牛乳代の比重が大きい。反当粗収益は水田地帯の農家に比較して少い。各作物の耕種概要別に発表する。